

ガ如クニシテ云々」の表現がある。『病源』には同様の表現を痘麻共に用いているので、これだけに基づいて当時の疫病を痘瘡か麻疹の何れかに同定することはできない。

(帝塚山学院大学)

丸山敏秋

## 嵇康『養生論』の一考察

自己の生を安らかに保って天寿を全うすることは、人間の根源的な欲望と言えよう。疾病を除かんとする医の行為も、この欲望に根ざしたものに他ならない。その中に、疾病を未然に防いで健全な心身を保つための養生の分野があり、予防医学として大きな役割を荷っている。

周知の通り、中国伝統医学においては早くから努めて養生が説かれている。その特質を明らかにするに先立ち、現在筆者は古代以来のいくつかの養生思想の特色を見出し、系譜づける作業を進めているが、その流れの中に嵇康という人物がいる。彼は医家ではない。しかしその著作『養生論』は医書にもしばしば引用され、中国医学思想史における養生の考え方に少なからぬ影響を及ぼしたと思われる。今回は彼の養生論の特色を明らかにし、古代以来の養生思想の流れの中で、それがどのように位置づけられるかを考

えてみたい。

嵇康(二二三—二六二)、字は叔夜、三国時代の魏の文人・思想家である。譙国銍(現在の安徽省北部)に生まれ、早くに孤児となったが、魏の王族と結婚して中散大夫に昇進、だがその名利を忌み、恬淡寡欲をよしとする性格は、彼を竹林の遊びへと誘った。老莊思想や神仙術に傾倒。琴を楽しみ、詩文に長じたが、不正を許さぬ反儒家的な激しい気性のため、友人呂安の事件に連座して処刑された。

優れた思想書と言うべき『養生論』(『文選』所収)は極く短いものであるが、竹林の友人向秀の批判(『難養生論』)をさらに嵇康自身が論駁した『答難養生論』を併せ読むとき、彼の養生に対する考え方をよく知ることが出来る。以下にその概要を述べる。

嵇康は精神と肉体の両方を養う必要を力説した。しかし「精神の形骸に於けるは、猶お国の君有るがごとし」と述べ、数々の例を示しながら精神が肉体を支配することを説く。すなわち彼は精神の優位性を認める立場をとったことから、総じて精神を養う養生の方法を論じた記述が多い。その要諦は、喜怒哀楽の情や思慮に累おそわされることなく、

常に清虚静泰、名利を捨てて欲を寡くすること(禁欲ではない)である。それはとりも直さず老莊思想において理想とされる境地にほぼ等しい。ただ一つ異なるのは、音楽が養生の為に益あると考えた点である(『老子』十二章「五音は人の耳をして聾おとならしむ」)。そこに琴を愛して『琴賦』まで作った嵇康らしさがよく窺われる。『医心方』巻二七に彼の言葉が引かれているのも、ほとんどがこうした養生に関する言説である。

他方、肉体を養う養形の面では、呼吸吐納と辟穀服食という神仙家的な方法を説いた。神仙説を奉ずる者との交わりが深かった嵇康は、神仙の存在を確信していた。神仙とは誰もがなれるわけではなく、導養の理を会得して特に異気を稟うけた者のみになれるのだと言う。呼吸吐納や辟穀服食もその為の方途であるが、嵇康の養生の論には後者についての記述が多い。彼は食物の摂取が人体の機能や疾病の発生に与える影響の大きさを痛感していた。辟穀とは、五穀が臟腑を汚して百病の原因になるとの考えから、それを避けることである。もとより滋味なるものも断たねばならない。その代わりに嵇康は、甘醪、流泉、柴芝といった命

を養う上薬の服用を唱え、上薬を服して長寿を得た過去の人物を例示している。それらの論述を見るといたずらな神秘性は感じられず、経験的に認め得る数多くの事柄が依り所とされているのである。そこに彼の食物や医学に対する豊富な知識と、合理性を重んずる精神を看取することが出来るよう。

ところで、中国古代においては養生についてのいくつかの論が提示されている。それを大きく四つのタイプに分類してみた。詳細は別に譲るが、①たとえは『素問』四氣調神大論に見える四季の養生のような、日常的・経験的な養生説、②老・莊、特に後者に顕著な、道との一体化を説く超越論的養生説、③『莊子』の中にやや萌芽が認められる神仙的養生説、④楊朱一派の主唱した快樂主義的な養生説、の四つである。後世の養生論を、それらの流れの中で位置づけてみることは興味深い。

嵇康の場合、上記④を除くタイプがみな有しているのであるが、とりわけ②と③のそれが強い。既に述べた如く、彼の養生の論は、音楽について以外はほぼ老・莊の立場を襲うものであった。そして彼は明らかに神仙の存在を信じ

て憧れ、神仙に至る方途の一つである辟穀服食に関心を寄せて主張したのである。

付言するに、嵇康を批判した向秀の論には、④のタイプに通ずる言説が多く認められる。神仙の存在もきっぱりと否定する彼の立場は、必然的に嵇康とは相容れないものであった。

(筑波大学大学院 哲学思想研究科)